《前期　風景》

Ⅰ　日本各地の佳景

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
1.	錦帯橋図	墨江武禅	一幅	絹本著色	江戸時代・18 世紀
2.	鳴門真景図	露木露珍	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
3.	嵐山春景図	喜多武清	一幅	絹本著色	弘化元年（1844）
4.	金城三大橋図	舜章	一幅	絹本墨画淡彩	江戸時代・19 世紀
5.	養老滝図	日比野鶴翁	一幅	絹本墨画	弘化 3 年（1846）
6.	妙義山第一石門図	菊池容斎	一幅	紙本墨画淡彩	江戸時代・19 世紀
7.	水府城千波湖図	伝立原杏所	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀

Ⅱ　富士を崇める

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
8.	富士三保清見寺図	忍海	一幅	絹本墨画	宝暦 7 年（1757）
9.	田子浦暁望図	谷文晁	一幅	絹本墨画淡彩	寛政 7 年（1795）
10.	富士三保清見寺図	狩野探信守道	三幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
11.	富士三保清見寺図	谷文晁	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
12.	旭日富士図	長谷川雪旦	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
13.	富士図	長谷川雪旦	一幅	紙本墨画淡彩	江戸時代・19 世紀
14.	富士図	佐竹永海	一幅	紙本墨画淡彩	江戸時代・19 世紀
15.	富嶽真景図	平井顕斎	一幅	絹本著色	天保 11 年（1840）
16.	七里ヶ浜真景図	谷文晁	一面	絹本著色	江戸時代・享和年間（1801 ～ 04）頃

Ⅲ　江戸・武蔵を眺める

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
17.	墨堤春景図	佐竹永海	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
18.	武州玉川烟渡図	春木南湖	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
19.	武蔵玉川図	狩野勝川雅信	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
20.	桐ヶ谷桜図	久保帯刀	一幅	絹本著色	嘉永 2 年（1849）
21.	汐干狩図	長谷川雪旦	一幅	絹本墨画淡彩	文政 12 年（1829）～天保 10 年（1839）
22.	江戸一目図	鍬形蕙斎	一幅	大判横	享和 3 年（1803）
23.	江戸名所一覧双六	二代歌川広重	一枚	木版多色摺	安政 6 年（1859）
24.	三十六花撰　東京北沢牡丹	二代歌川広重	一枚	大判錦絵	慶応 2 年（1866）
25.	桜田彦根井伊家上屋敷図		一枚	紙本著色	江戸時代・19 世紀
26.	江戸名所　外桜田弁慶堀	歌川広重	一枚	大判錦絵	嘉永 7 年（1854）
27.	江戸名所百景　外桜田弁慶堀糀町	歌川広重	一枚	大判錦絵	安政 3 年（1856）

《後期　日々のいとなみ（風俗）》

Ⅳ　農耕と年中行事

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
28.	四季耕作図屏風	岸禮	一双	紙本著色	江戸時代・19 世紀
29.	四季耕作図		十二幅	紙本著色	江戸時代・17 世紀
30.	春秋野趣図	長谷川雪旦	二幅	絹本著色	天保 10 ～ 14 年（1839 ～ 43）
31.	耕作図	喜多武清	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
32.	年中行事風俗絵巻		二巻	紙本著色	江戸時代・19 世紀

Ⅴ　参詣と物見遊山

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
33.	駒競図屏風	相澤五流	一隻	紙本著色	文化 8 年（1811）
34.	伊勢詣図		一幅	紙本著色	江戸時代・19 世紀
35.	伊勢名所図会	歌川貞秀	三枚	大判錦絵	弘化 4 年(1847)～嘉永 5 年(1852)
36.	相模国大隅郡大山寺雨降神社真景	歌川貞秀	三枚	大判錦絵	安政 5 年（1858）
37.	富士山諸人参詣之図	二代歌川国輝	三枚	大判錦絵	慶応元年（1865）
38.	三国第一山之図	歌川貞秀	三枚	大判錦絵	嘉永 2 年（1849）頃

Ⅵ　武士の日常

№	作品名	作者等	員数	材質・技法等	時代・年代等
39.	城中参伺図	喜多武清	一幅	絹本著色	文政 10 年（1827）か
40.	箱根富士山図	喜多武清	一幅	絹本著色	江戸時代・19 世紀
41.	経字弁才天像	加藤信清	一幅	紙本著色	享和 2 年（1802）
42.	【参考出品】富士巻狩図		三幅	紙本著色	江戸～明治時代・19 世紀
43.	【参考出品】駒場野鹿狩陣立図		一枚	紙本著色	享保 8 年（1723）か
44.	【参考出品】江戸名所図会 駒場野　二代歌川広重		一枚	大判錦絵	江戸時代・19 世紀

《画家一覧》

◆墨江武禅（すみえ ぶぜん） 享保 19（1734）～文化 3（1806）前

大阪の人。船頭を生業にしていたが、その後彫金を手掛けた。画は月岡雪鼎に学び、独自に中国画を研究するなど研鑽に励み、ついに一家を成した。幅広い画風で、山水人物に長じたという。

◆露木露珍（つゆき ろちん） 生没年不詳 前

阿波（現徳島県）の生まれ。『平安人物誌』（文化十年版）に名が確認でき、文化年間頃の活動が知られている。しかし、師承関係は不明で、情報も少なく、実像はよくつかめていない。

◆喜多武清（きた ぶせい） 安永 5（1776）～安政 3（1856）前・後

江戸の生まれ。谷文晁門下の俊英。様々な画風に通じたが、特にやまと絵の画技に優れていた。寛政 8 年(1796)、『集古十種』編纂事業のための関西古社寺調査に参加、古画等の模写に力を発揮している。

◆舜章（しゅんしょう） 生没年不詳 前

経歴不詳。『新撰　浪華名流記』（弘化 2 年）に名が載る「三島舜章」に該当する可能性がある。

◆日比野鶴翁（ひびの かくおう） 明和元（1764）～弘化 4（1847）前

養老郡高田（現岐阜県養老郡養老町）の生まれ。画の師は南蘋派の山田鶴洲（1744 ～ 1803）。師同様沈南蘋の画風を旨とし、細密で色彩鮮やかな花鳥画を得意としたが、文人画風の墨画にも秀でている。

◆菊池容斎（きくち ようさい） 天明 8（1788）～明治 11（1878）前

江戸の生まれ。当初は河原姓を名乗る。画は 18 歳の時高田円乗（えんじょう）に師事して狩野派を学び、以後、わが国諸派の画風や、西洋画、中国画など幅広く学び、写生にも力を入れた。人物画を得意とし、主に歴史画の制作で名声を博した。世田谷ゆかりの画人である。

◆立原杏所（たちはら きょうしょ） 天明 5（1785）～天保 11（1840）前

父は水戸藩藩校彰考館総裁を勤めた儒学者立原翠軒。画は、水戸で小泉檀山や林十江などに学び、江戸勤めとなってからは谷文晁に就いた。気品があり清々しい色遣いの山水画や花鳥画に特徴があるとされるが、幅広い画風をこなした。

◆忍海（にんかい） 元禄 9（1696）～宝暦 11（1761）前

江戸の人。浄土宗僧。画中の「無礙子」は号。若い時分より絵を学び、僧門に入っても絵画制作を続けた。中国画や古画の研究にも精力を注いでいる。蘭や梅の墨画や、篆書、印章作りが得意だったという。服部南郭など時の文化人達とも交流した。

◆谷文晁（たに ぶんちょう） 宝暦 13（1763）～天保 11（1840）前

江戸の生まれ。田安徳川家に仕えた漢詩人谷麓谷の長男。画は加藤文麗、渡邊玄対などに師事、北山寒巌、鈴木芙蓉、渡辺南岳らの影響も受けて、様々な流派の画風を身に付けた。弟子教育にも秀で、画塾写山楼には多くの俊英が集った。江戸後期江戸画壇を牽引した最重要画人の一人である。

◆狩野探信守道（かのう たんしん もりみち） 天明 5（1785）～天保 6（1835）前

奥絵師鍛冶橋狩野家七代目。優美で艶やかな色彩のやまと絵風人物図や花鳥図に定評があった。風俗画への関心が高く、奥絵師として異色の存在。弟子にも諸派の画風を自由に学ばせたとされる。

◆長谷川雪旦（はせがわ せったん） 安永 7（1778）～天保 1 4（1843）前・後

陸奥棚倉藩藩士・金沢某の子という（本姓は後藤とも）。雪舟十三代を称した長谷川雪嶺に師事して画技を磨いたが、他流派も含め幅広く画を学んだ。唐津藩小笠原家の御用絵師となり、江戸を拠点に活躍した。

◆佐竹永海（さたけ えいかい） 享和 3・1803 ～明治 7・1874）前

奥州会津の生まれ。家は代々蒔絵師。画は会津で狩野派の萩原磐山に学び、文政年間初め頃江戸に出て谷文晁に師事、幅広い画風を習得した。その後彦根藩井伊家御用絵師。彼も世田谷ゆかりの画人である。

◆平井顕斎（ひらい けんさい） 享和 2（1802）～安政 3（1856）前

遠江国（現静岡県）の生まれ。画は谷文晁門下で掛川藩御用絵師の村松笠斎に、後、江戸に出て谷文晁に学ぶ。一端帰郷し再び上京、渡辺崋山に師事した。崋山十哲の一人。絵は山水花鳥人物ともによくした。

◆春木南湖（はるき なんこ） 宝暦 9（1759）～天保 10（1839）前

江戸の人。画の師は大阪の木村蒹葭堂とされる。伊勢長島藩藩主増山雪斎に仕えた。山水花鳥を能くし、淡雅な墨画に優れ、谷文晁と並び称された。また、詩文にも秀で、当時の文化人達と幅広く交流した。

◆狩野勝川雅信（かのう しょうせん ただのぶ） 文政 6（1823）～明治 13（1880）前

江戸の生まれ。幕府奥絵師木挽町狩野家最後の当主（十代目）。先代晴川院養信の長男。父より画を学ぶ。明治維新で解職となり、大蔵省などで職に就いたという。門人に狩野芳崖、橋本雅邦らがいる。

◆久保帯刀（くぼ たてわき） 天明 7（1787）～文久元（1861）前

江戸の人。画中の「酔桜」は号。青山長者ヶ丸（現南青山 4 丁目）に住んでいた幕臣。園芸を好み、とりわけ桜を寵愛した。邸内には、白桜亭と称す江戸市中屈指の桜園があったことで知られる。帯刀没後白桜亭は閉ざされ、軸装画も散逸した。その一つが本展出品作である。

◆鍬形蕙斎（くわがた けいさい） 宝暦 11（1761）～文政 7（1824）前

江戸生まれ。畳職の家業は継がず絵師を志し、初め浮世絵師北尾重政に就き北尾政美を名乗る。多くの版本挿絵で名をなし、武者絵や花鳥画、浮絵なども手掛けた。寛政 6 年（1794）に美作・津山藩の御用絵師に異例の抜擢を受けた。

◆歌川広重（うたがわ ひろしげ） 寛政 9（1797）～安政 5（1858）前

江戸の生まれ。葛飾北斎と並び称された江戸後期屈指の浮世絵師。師は歌川豊広。江戸後期の旅行、行楽ブームに乗った「東海道五十三次」や「江戸名所百景」などの風景版画シリーズを手掛けて好評を博し、一躍時の人となった。

◆二代歌川広重（にだい うたがわ ひろしげ） 文政 9（1826）～明治 2 年（1869）前・後

歌川広重（初代）の門人。弘化年間頃初代に師事。初め重宣（しげのぶ）を名乗る。師の指導を受け、美人画や花鳥画、武者絵、風景画など幅広く手掛け肉筆画も描いた。「名所江戸百景」のうち「赤坂桐畑雨中」など数点を担当している。

◆岸禮（がんれい） 文化 13（1816）～明治 16（1883）後

京都の生まれ。岸派二代目岸岱の次男。父に画を学ぶ。岸派の画風に基づいた幅のある画域や様々な画題を器用にこなせたようだ。とりわけ人物花鳥をよくしたという。維新後東京に移住し、当地で没した。

◆相澤五流（あいざわ ごりゅう） 延享（1746）～文政 5（1822）後

多摩郡関戸村（現・多摩市関戸）名主家の出。五流も家を継いだ後、50 歳で隠居するまで名主役を務めた。画は主に府中の絵師・関良雪に学び、良雪没後は加藤文麗などにも師事した。人物画に優れ、面貌表現に特徴がある。世田谷代官大場家とも交流があった。

◆歌川貞秀（うたがわ さだひで） 文化 4（1807）～明治 12（1879）後

下総国布佐（現千葉県我孫子市）の生まれ。本姓は橋本氏。初代歌川国貞の門人。版本挿絵で名をあげ、その後美人画、芝居絵、団扇絵、武者絵、風景画、肉筆画など幅を広げた。細密描写と画面構成力に優れ、その才は俯瞰描写による風景画に遺憾なく発揮された。横浜絵の作例も多い。

◆二代歌川国輝（にだい うたがわ くにてる） 天保元（1830）～明治 7（1874）後

三代目歌川豊国の門人。住まいは深川御蔵前町。文久頃から作画活動を始め、初め国綱を名乗り、その後国輝を称した。風刺画や役者絵、街道物を得意とし、細密精緻な描写にも優れていた。開化絵でも名をなしている。

※ 前＝前期出品画家、後＝後期出品画家